

# 同志社大学

## 2015年度 個人研究費研究経過・成果報告書

2016年 2月 22日提出

所属	職名	氏名
心理学部	准教授	田中あゆみ
研究題目	達成目標が前頭葉賦活に及ぼす影響 -fNIRS を用いた評価-	
研究成果の概要	<p>本年度の研究成果は、達成目標と実行機能の関連を検討する実験を実施したことであり、研究は計画通り進行した。</p> <p>実験の参加者は大学生 108 名であり、達成目標を教示する 4 群（マスタリー接近・マスタリー回避・パフォーマンス接近・パフォーマンス回避）と統制群に参加者をランダムに配置した。マスタリー接近・回避群には、ワーキングメモリーを向上させる課題を行うと教示し、さらに、マスタリー接近群には、練習の平均回答時間と正答率よりもよくなることを目標とさせた。マスタリー回避群には、練習の平均回答時間と正答率より悪くならないことを目標とさせた。パフォーマンス接近・回避群には、ワーキングメモリーを評価する課題を行うと教示し、さらに、パフォーマンス接近群には、他の人の練習での平均回答時間と正答率よりもよくなることを、パフォーマンス回避群には、他の人の練習での平均回答時間と正答率より悪くならないことを目標とさせた。統制群には、課題に関する課題を特に行わなかった。実行機能課題として、Cambridge Cognition 社の CAMTAB（Cambridge Neuropsychological Test Automated Battery）の中から、計画力や空間認知能力を測定する One Touch Stockings of Cambridge (OTS)課題を使用した。</p> <p>実験の結果、難易度の低い試行においては目標の効果はなかったが、難易度の高い試行において目標の違いによる有意な差がみとめられ、統制群と比べて、他者よりよい成績となることを目指すパフォーマンス接近目標について、統制群より正答率が低く、先行研究に一致する結果を得た。さらに本研究では新たに、練習より成績が悪くならないことを目指すマスタリー回避目標についてもパフォーマンス接近目標と同様の結果が得られたが、仮定されたパフォーマンス回避目標と課題成績との負の関連はみとめられなかった。</p> <p>以上、本年度は、達成目標の違いによって前頭葉の活動が異なる可能性を示唆する重要な基礎データを得ることができた。なお、この結果については 2016 年 8 月に開催される International Conference on Motivation で発表を予定している。</p>	